

さくらクォーターリー・レビュー The Sakura Quarterly Review

順天堂大学さくらキャンパス図書新聞

Volume 4. Summer 2021

BOOK & FILM REVIEW

『シン・エヴァンゲリオン劇場版: ||』

企画・原作・脚本 総監督／庵野秀明

制作／スタジオカラー

配給／東宝、東映、カラー

2021年 公開

「考察せよ」というフレーズはレポート課題につきものである。ただの“まとめ”でも“感想”でもない“考察”に苦しめられた学生も多いのではないだろうか。“考察”とは単純には“深く考えること”とされてしまうことがあるが、得られた状況やデータ・背景事実を基にある事象が起こった経緯を分析し結論に至る、その過程であるといった方が正確だろう。事象の正確な分析、数的センス、判断に必要な知識量など特に多くの能力が必要とされ、高校以前の教育には取り入れにくい、大学教育特有の課題ではないかと考える。個人的には“考察”は楽しい瞬間である。過去の論文や書籍を基礎に自分で得た結果が示す意味を解釈し、既存の理論と比較し自分なりに推論を組み立てていく、さながら名探偵にでもなった気分である。

アニメにおいて、この「考察の楽しさ」を軸の一つとして人気となった作品が『新世紀エヴァンゲリオン』である。詳しくない方のために解説しておこう。新世紀エヴァンゲリオンは1995年にテレビ東京系でTVシリーズが放送され、1997年にはTVシリーズの別結末として劇場版が公開。ここで映像作品としては一区切りついたのだが、2006年より本作を新たな設定・ストーリーで再構築した『エヴァンゲリオン新劇場版』シリーズが発表され、昨年までに「序」「破」「Q」の3作が公開、そして今春最終作『シン・エヴァンゲリオン劇場版:||』が公開された。セカンドインパクトと呼ばれる事件によって人類が激減した世界を舞台に、使徒と呼ばれる正体不明の敵をエヴァンゲリオンと呼ばれる人型兵器で迎え撃つ組織に入った少年・碇シンジを描く、誤解を恐れずに言うといわゆるロボットアニメである。

娯楽映像としての質の高さはもちろんのこと、ここで特筆すべきは内容の難解さだ。作品序盤から数々の伏線が張られ、さらに何の前振りもなく物理学や生物学だけでなく心理学や神学の専門用語が多用される。単純なロボットアニメの構図の後ろで主人公はもちろん視聴者をも置き去りにして話がどんどん進んでいき、中盤以降は注意せず見ていると何だかサッパリわからなくなってしまう。しかし動画のクオリティの高さと演出の巧みさがマニアを引き付け、難解な話を“考察”により理解しようという試みが盛んに行われた。解釈をめぐる論争がファンを虜にし、カルト的人気がメディアを通じて世間に拡散されブームとなり、エヴァは日本におけるアニメ考察文化を確固たるものにしたのである。

その、エヴァが25年の時を経てようやく完結する。現役エヴァ世代としては感無量である。公開から既に1週間で数多くの考察サイトやネットニュースが乱立しており、自分の意見をこれらと対比させて考えるのはやはり面白い。この原稿がいつ掲載されるのかは知らないが、気になった方はTVシリーズ、もしくは新劇場版「序」から視聴をはじめて欲しい。

…は？シン・エヴァの感想？自分の教養不足で理解の及ばないシーンがいくつかありましたが、たのしかったです！庵野監督、25年間ありがとうございました！シン・ウルトラマンも期待しています！

(医学部 矢田 雅哉)



『青くて痛くて脆い』

原作：佐野よる『青くて痛くて脆い』

KADOKAWA、2018年

映画公開日：2020年8月28日

2018年に「二十歳が一番読んだ小説」に輝き、ベストセラーとなった著書が実写映画化。「大切な仲間」と「居場所」を奪われた大学生の青年が、嘘と悪意にまみれながら復讐していく、まさに青くて痛くて脆い青春サスペンス（映画公式サイトから引用）。

「この青春には、嘘がある」「彼女は死んだ——僕は忘れない」などの言葉の裏には、果たしてどんな意味があるのだろうかかと観る前は考えていました。主人公の学生生活を見て、「懐かしい」と思う反面、「対人関係やいざこざで心理的に傷つくことって辛いよな」と、どこか当時の自分と通ずる部分があり、その上で、終盤の“嘘”には度肝を抜かれました。

人は誰しも、誰かを傷つけてしまったり、対人関係が上手くいかなかったり、思い悩むことが多いと思います。特に、長いようで短い大学生活4年間では多くの事を学び、その都度、成長していきます。だよな？笑

映画のタイトルに含まれている「青」という漢字には、「青春、青筋を立てる、青菜に塩、青くなる、青写真を描く、青二才、隣の芝生は青い」と様々な意味があります。本映画には大学生生活で感じたり、経験する色んな「青」が含まれています。もちろん、皆さん自身がこれらの「青」を在学中にきっと学んでいると思います（先生方には懐かしく思えたり?）。

学生の皆さんが本映画を観た時に、何を想うのか、心理学的にととても気になります。

そして最後に「いま居る本当の友達を出来れば大切にしてほしい」とそっと添えておきます。

（スポーツ健康科学部 山口慎史）



『ヘアスプレー』

監督：アダム・シャンクマン

出演：ジョン・トラヴォルタ、ミシェル・ファイファー 他

DVD 角川映画 2009年

近年、世界的に見ても社会的マイノリティに対する差別をなくし多様性を尊重する社会へと変化しつつある。その一方で、2020年にはアメリカ系アメリカ人に対する残虐行為を行ったことがきっかけで

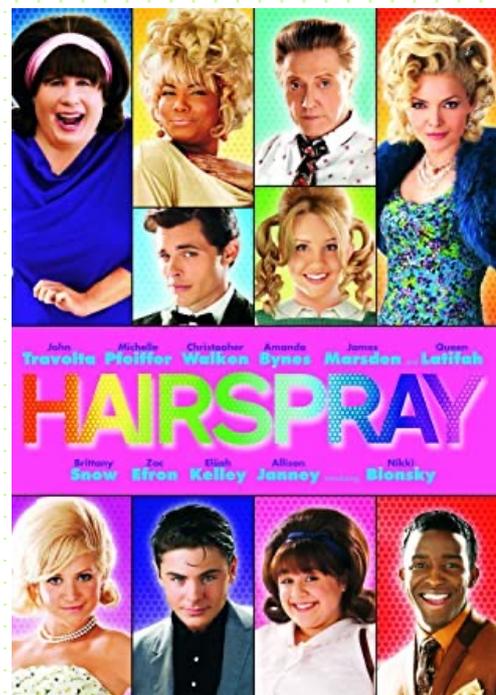
BLM(Black Lives Matter)運動が展開され、日本でも女性差別や軽視などの問題が多く取り上げられている。しかし、近代以前はもっとひどい状況下の中で社会的マイノリティに対する差別が多く行われており、社会的マイノリティである人々は社会的地位や権力が低く見られ、差別的かつ軽蔑的な待遇を受けるケースが多く存在していた。そのため異質な存在として自信を意識し隠そうと試みる、あるいは少数派として集団で行動するような特徴が多く見受けられた。この『ヘアスプレー』(2007)という作品は1960年代初期のアメリカの人種差別について主に描かれており、その他にも様々なマイノリティが直面する問題が盛り込まれている。

この映画はフィクションではあるが実在している都市が舞台となっており、実際に存在していた問題なども描かれている。一見難しく感じられるかもしれないが、ミュージカル映画であるため明るくポップで親しみやすい映画となっていて、ストーリーも音楽も楽しみながら見ることが出来る。主人公は地元で人気のテレビ番組である「コニー・コリンズ・ショー」に出演することを夢見ているトレイシー。誰もが彼女のことを好きになる、そんなキャラクターである。ある日、番組レギュラーメンバー(ミスヘアスプレー)のオーディションが開催されると知り、オーディションへの挑戦を決意するトレイシーに様々な差別やマイノリティの問題が立ちはだかる。そのような問題に対し、トレイシーや周囲の人々が行動を起こし、徐々にマイノリティを受容し変化していくストーリーが描かれている。

特に印象的な場面は、ラストに全員がステージに出てきてダンスを踊る場面である。そのシーンはマイノリティである自身についての葛藤や、周囲に隠していた感情などを全て乗り越えた彼らの気持ちがダン

スに現れていて非常に見ごたえのあるシーンとなっている。誰にでも周囲の人に言えないコンプレックスやマジョリティではないという自覚に伴う劣等感や躊躇があるだろう。そのような感情を乗り越え、自身で短所だと感じている部分でさえも肯定し、受け止められるようになる。前向きな気持ちへと背中を押してくれる、楽しい映画となっている。是非、自分に自信をつけたい多くの人に見てもらいたい。

（スポーツ健康科学部 4年 糸川奈江）



『利根川図志(とねがわずし)』

赤松(あかまつ)宗旦(そうたん)

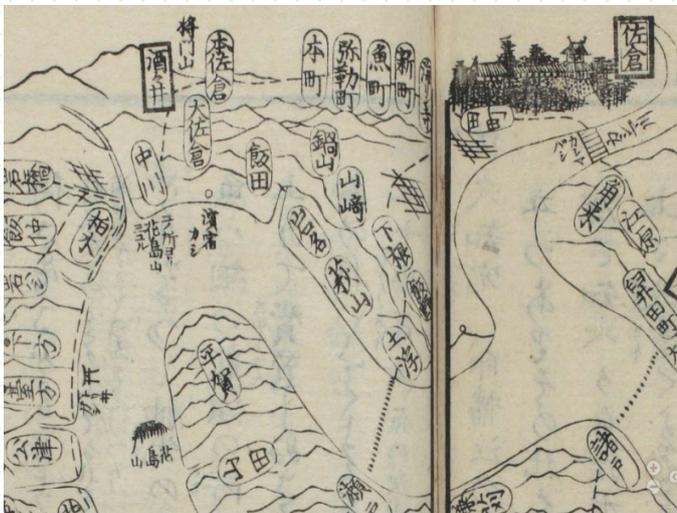
(全六冊/安政2年〔1855〕自序)

向かいの研究室の庄子先生から、何かオススメの本があったら、是非、紹介文を寄せてくださいと、お誘いを受けた。幸いにして、その際「どんな本でも良いので」と、先生は確におっしゃっていた。せっかく「どんな本でも」とおっしゃっていたことであるし、この際、それを逆手にとって、江戸時代の本を紹介してしまおう。

この『利根川図志』という本は、高校以来の愛読書の1つだ。利根川沿い地域に関する本で、地名、名所、産業、交通、昔話、習俗など、さまざまな地域の情報が詰め込まれている。こういう本を地誌という。その序文に「安政二年」(1855)という年号が書かれているが、実際に刊行できたのは、それから2年ほどたってからのことであつたらしい。順天堂を創立した佐藤泰然(1804-1872)が、正式に佐倉藩士に取り立てられて、藩医となったのは、嘉永6年(1853)のこと。隠居して、養子の佐藤尚中に家督を譲ったのが、安政6年(1859)のことだから、ちょうど泰然が佐倉で藩医として活躍していたころに、世に出された本というわけである。

「古文なんて読めないし、江戸時代の本なんて…」と、アレレギー反応を引き起こしている方も、もうちょっとだけで良いから、耐え忍んで、私の話を聞いてもらいたい。この本に文字で書かれていることも、もちろん読んでいくと面白いのだが、もう一つの醍醐味は、挿絵なのである。葛飾北斎(二代目?)や歌川広重も、この本の挿絵を描いた絵師として名を連ねており、絵だけをバラバラ見て行くだけでも大変面白い。開いていると突然、鮭の絵が出てくるが、当時、利根川でよく鮭が取れたなんているのは、それこそ目からウロコだろう。また、あなたの自宅が利根川沿いにあるのなら、幕末のころの近所の様子も絵に描かれているかもしれない。

利根川沿いに自宅がない方も、あなどるなかれ、この本には、幕末を身近に感じられる情報が満載だ。順天堂大学さくらキャンパスに通っているのなら、例えば、次の図は、きっと楽しんでもらえるのではないかと思う。



「印旛沼全図」という地図だが、「酒々井」と「平賀」という地名が見える。平賀については、こんもりと小高く突き出していて、今の大学のキャンパスのあるあたりとよく似た地形が描かれていて面白い。ただし、そこから酒々井との間には、どうも無地の空白で隔てられている。そう、印旛沼だ。今でこそ、右を見て左を見て、一面の田んぼだが、そこは当時、すっかり印旛沼の底だったのだ。もしも佐藤泰然が平賀に来ることがあったなら、きっと舟で渡ったことだろう。もしも、今も地形が、そのままだったら、酒々井駅からは、自転車やスクーターなんかじゃなくて、泳いで渡るか、モーターボートだろう。遅刻しそうなきときは、かなり大変だ。

最後になるが、この本の著者、赤松宗旦(2代目/義知)は医師で、文化三年(1806)に下総国布川河岸(現在の茨城県北相馬郡利根町)で生まれている。父の赤松宗旦(初代/患)は遠江国(現在の静岡県西部)の出身で、江戸で医学を学び、布川に住んだ。義知が5歳の時に一家で江戸に出るが、8歳で父を失い、母の実家である下総国吉高村(現在の千葉県印西市吉高)に移った。義知はこの地で育ち、やがて、医師を開業した。後に、義知は再び布川に移り住み、文久二年(1862)に、ここで生涯を閉じた。文化人として、さまざまな交流もあったように見受けられるのだが、近隣の同業者なのだから、ひよっとすると、佐藤泰然とも直接の交流はあったのではないかと、思わず想像してしまう。

そんな貴重な本、なかなかお目にかかれないうんじゃないかって?ご安心を。この本は、国文学研究資料館のものがインターネット上で無料公開されているので、お手元のスマートフォンやタブレットでも気軽に閲覧できるのだ

(<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200019463/>)。もしも、読みやすい本文が御所望ならば、柳田国男が解説をした岩波文庫版が国立国会図書館デジタルライブラリーで、無料公開されている(<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1225314>)。

「いやいや、私は飽くまでも自分自身の力で江戸時代の文字を解読したいのだ」という奇特な方は、AI手書きくずし字検索

(<http://www.ai-kuzushiji.net/>)で、一文字ずつ、検索を掛けてみるか、無料公開のスマホ・アプリ「KuLA」で、くずし字読解のトレーニングをすると良いだろう。一週間くらいで、当時の文字が、すらすら読めるようになっちゃうかも?

(スポーツ健康科学部 杉山和也)

本をめぐる旅 第4回

国立国会図書館

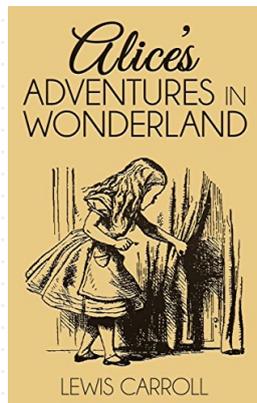
国際子ども図書館（上野）

展示会「スポーツと子どもの本」



京成線上野駅下車、さくらキャンパスからも乗り換えなしで行ける国際子ども図書館で開催されていた展示会「スポーツと子どもの本」に行ってきました。（途中臨時休館を経て、展示は6/13に終了）

国立国会図書館本館及び国際子ども図書館の所蔵資料を中心に、国内外で出版された「スポーツの場面」を描いた児童書が展示。『キンダーブック』等の廃刊になった児童向け雑誌展示も充実しており、1964年に開催された東京オリンピックが子供向けの雑誌や絵本でどのように紹介されていたのか、そして近年注目度が増しているパラリンピックについて扱った子供向けの本も時系列に確認することができます。



Alice's Adventures in Wonderland and Through the Looking Glass
by Lewis Carroll & John Tenniel

『不思議の国のアリス』では、ゲートボールの原型であるスポーツ、クロケット(Croquet)が描かれています。19世紀後半、女性でもできるスポーツとしてイギリスで流行しました。

からだを動かす楽しみを言葉遊びを交えて表現した絵本や、スポーツを題材にして子どもたちの日常や成長を描いた児童文学、そして『かこいをこえたホームラン』のように第二次世界大戦中の日系人収容所で野球を支えにして苦難を乗り越え成長していく少年の姿を描いた本も。苦難の時代にあつて、子供はスポーツとどのように対峙してきたのか。子どもの視点からスポーツとの関わりを見つめ直すことができます。



『かこいをこえたホームラン』

ケン・モチヅキ 作
トム・リー 絵
ゆりよう子 訳

岩崎書店 1993

展示を楽しめたのはもちろんですが、館内に入って、まず建物の美しさに魅了されます。明治時代の建築を現代に生かした空間は、古さと新しさが共存しており、書物と向き合うのにぴったりです。一人でゆっくり資料探しに来たくなります。（入館料は無料）



「宮沢賢治が失恋を経験した階段」やドアの引き手に刻まれた文字について等、興味深いエピソードを交えて丁寧に館内を案内してください。企画協力課広報係の福井様をはじめとして、スタッフの方々のご協力に感謝いたします。皆さんも明治時代の意匠を生かした美しい館内で、国内外の貴重な児童書との出会いを求めて足を運んでみてはいかがでしょうか。ちなみに、館内カフェの窓から見える銅像は筋骨隆々とした槍投げの人物です。図書館にある像としては珍しいかもしれませんが、本学の学生を歓迎しているような気がしませんか。ご親切にも、国際子ども図書館の福井様もそのように指摘してくださいました！

資料探しはもちろんのこと、緑豊かな上野の美術館エリアを散策した後、立ち寄るのに素敵な場所です。

（スポーツ健康科学部 庄子ひとみ）

編集後記：ご寄稿くださった皆様、そして国立国際子ども図書館の皆様、本当に有難うございました。

国立新美術館では、今回紹介されているシン・エヴァンゲリオン庵野監督の特別展(10月～)も予定されています。外出もままならない現状ですが、これからも読書や映画の楽しみを積極的に紹介していきます！

学術メディアセンターから

パソコンの館内貸出を再開しました。利用時間等に制限がありますが、閲覧席も利用できます。詳細はホームページを参照ください。

開館時間：平日 9:00-17:00 土 9:00-13:00
<https://www.juntendo.ac.jp/sc/library.html>

原稿募集！

おすすめの本や映画をぜひ紹介してください。新刊/新作である必要はありません。原稿はWordファイルで作成し、hi-shoji@juntendo.ac.jp さくらクォーター・レビュー編集部(庄子ひとみ研究室)宛に添付ファイルで送信してください。